

結草

kusa musubi

No.19

Publishing house: 2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2015.11.01

迷いの身を生きる

光闡坊住持 佐野 明弘

教えを聞く場

こんにちは。ようこそお参りくださいました。今日は報恩講というところでございますが、こういう場が開かれることを会座とか、法座とこういうふうにはずつと言ってまいりました。これは二五〇〇年昔、お釈迦さまの時代からですね、法座、会座というものが開かれているのですね。この『真宗聖典』の最初に「仏説無量寿経」というお経がございます。そこにもですね、会座の様子のでてまいります。耆闍崛山というところにいるんな人が集まっ

ておつてですね、そこでお釈迦さまが法話をなさる。そういうことが書いてあるのですね。この会座というところに集まってこられる方はどういう方々かといえますと、皆人間という命に生まれてですね、そして何かにぶち当たったりしてですね、生き辛いといえますか、どう生きていっているのか、あるいは自分というものをどう受け止めていたらいいのかという、そういう問題を抱えて集まってこられるのですね。ですから単に一つの会座、集まりではありますけれども、そこが同時

に教えを聞く場なんですね。教えを聞くといっても勉強のために聞くのでなしに、自分というものをどういただいていったらよいか、そのことを教えに聞く法座、法座というものがずつと開かれてきたのですね。ですから、私も含めてですけどね、お集りの方々は他所の人の話ということではなしに、皆死んでいかねばならないこの生涯というもの、自分というものを、本当にどう願っていったらいいのか、そのことを聞く場所が実は開かれていますね。そういうことでござい

ますね。この地球上には数え切れないほどの色々な種類の生命がその営みをして命を終えていきます。生まれて三十分ほどで死んでいくものもおるんだそうです。水の中にも、土の中にも、地面の上にも、山の中にも、いろんな命が展開しております。そして私たちは、気が付いてみたら人間という命をいただいておった。この人間というものがなかなか厄介でないですか。そう思いま

せんか。人間ほど迷いの深いものはありませんし、人間ほど激しく悲しんだり、激しく怨んだりしません。そういう生き物は人間だけです。ですから他の生き物は、あんまり教えを聞くということは必要ないみたいですけど、人間は自分の人生の問題を抱えて、自分の問題でありながらどうしても自分で決着がつかないので、そのことを私たちに先立って苦悩して、そこに道を見出した方の言葉に聞くわけですね。

生死を明らかにする

曹洞宗では、「生死を明らかにする」といいます。「生死」こう書くのが最近は何と読みますか? 「せいし」と読む方が多くなってきましたね。でも仏法の読み方だと「しようじ」と読みます。読み方が違うだけでなく「せいし」といったら生きるか死ぬかという意味です。生死の境を行ったり来たりするといえますね。だけれども「しようじ」と読んだ場合には、生きるか死ぬかではなくて、迷いのことをいいます。

生死流転とこういいますけれども

も、生死という言葉は、元々のインドの言葉では「サンサーラ」という言葉で、インドで書かれた言葉を漢字でこう訳しているのですね。迷いを経巡ることを生死とこういうのです。その生死を明らかにする、これが仏法の一大事の因縁である。これは道元禪師どうげんぜんしの教えですけども、私たち真宗の教えを聞いている者も、一体何が本当に私にとって問題なのだろうか。

本当の問題

日々の目先の問題はいくらでも思いつくのですね。食べていけない、なるんじゃないかと、身体が動かなくなるんじゃないかと。どこか痛いよね、癌じゃないかと思ったりするわけですね。そういうものは明らかに激しく迫ってきますので見えやすいのです。皆さんは、一体何が問題ですか。本当の問題は一体何ですか。分かる人いますか？自分にとってはこれが一大事だと。このことがはっきりすればもう生まれてきたことは成就する、つまり死んでいけると。今死がやってくるとしたらもういい

ですか？今晚(笑) いやですね。じゃあ、いつになつたらいいんやといつたらですね、いつになつても駄目です。つまり生まれてきて本当に為すべきことを為し終えていかないと死にきれないで死んでいくのです。

結論から申しますと、本当に満足して命を終えていったのはお釈迦さま位です。たいてい凡夫は死にたくないとしながら仕方なしに死んでいくしかないのです。縁によつては「皆さんありがとう、お先に」という人もいますけどね。でも本当に満足して命を終えるということは凡夫にはなかなかできません。そういう私たちに本当の問題って一体何だと言われてもこれがなかなか分からない。

老病死

目先の激しく迫ってくる問題、これは老病死という言葉でお経には出てきます。「老病死を見て世の非常を悟る」(『真宗聖典』三頁) いつまでも続くわけじゃないんだぞという意味ですね、非常というのは。常に非

いくんですね。気がつきませんけどね。免許書の写真なんか見ると随分違うんですね、もう。ゴールドなんかで六年位経っていると随分老けたなって思いますね。一刻一刻、老いていきます。

動物も老いていくんですけれども、人間のように悩んでないですね。人間は老いていくとどうなっていくかを考えるわけです、人間は明日、明後日と考える能力を持つているのでね。動物はあまりそういうことを考えないみたいです。一日一日をその通りに生きていくように。ですから老後の保険を掛けているような犬いらないでしょう。老後が心配だなんて犬いらないですよ。まあ犬語が分からないので聞いたことはないですけどね。

人間が老いを苦悩と思うのは、動けたことが動けなくなっていくって、さらに他人の世話にならなければ生きられなくなっていくって。憶えていたこともみな忘れてしまし、聞こえなくなつて、膝は動かなくなつて、そういうふう思うと不安になるんですね。現代は特に歳を

とつたら終わりだという感覚が強いです。

昔は年寄りは大事にされたんです。昔ですよ。私が子供の頃は、やっぱりおじいちゃん、おばあちゃんというのには大事にしなければならなかった。亀の甲より年の劫だ。なんでも分からないことはおじいちゃん、おばあちゃんが知っていたわけです。でも現代はね、おじいちゃん、おばあちゃんに何を聞いても分からないでしょう。パソコンでもなんでもひとつも分からないです。かえって動けなくなつてくると邪魔にされる。もう年の功より亀の甲の方がずっと使い道があるんだという、そんな時代になってきました。

そうすると尚更、老いていくということは要らないものとして見られてしまう。これは厳しいですよ。みんなから邪魔者にされたら生きていけないです。みんなに嫌われたり、のけ者にされたり、要らないものとして扱われたら、人間は尊厳を保つことはできません。だから老いの苦しみというのは、ただ歳を重ねるといふ意味だけではなくてね、



そこに付随する恐れがあるわけですから。要らないものになっていってしまうのではないだろうか、皆の邪魔にされてしまうのではないだろうか。

病もそうです。犬や猫も病になるけれども、あんまり騒ぎませぬね。静かです。人間は騒ぐんです。何を騒ぐかというところ、病が苦しいとまず痛いとかそういうところがあるんですけれども、それだけではなくて、その痛みがいつまで続くんやろうと思つくと辛くなるんです。これがずっと続く位ならもう終わりにしたいと思つたりね。病を苦にして自ら命を

絶つ人がやはりいますね。そして死がやってくるといふことがあります。死によって今までやってきたことを奪い去られてしまいますしね。自分だけの死ではなくて、大切な人に先立たれるという苦しみもあります。

活命の問題

こういうものは誰も避けられないです。お金持ちだろうが、貧乏だろうが、これは平等なんです。お金持ちであろうが、貧乏であろうがこれは避けられないんです。お金を積んだら老いがなんとかなる、そんなことないでしょう。どうにもならないです。ですからどの人もこういう身を抱えている。老病死の身を抱えているんです。老いたり、病になったり、死んでいくということとは生活、生きるということに直結した問題です。だからなるべく病にならないように栄養分を摂ったり、運動をしてみたり、風邪をひかないように温かくしたり色々するわけですね。しませんか。するでしょう。そういう問題というのは、生きるとい

う問題。それに私たちは毎日忙しいのです。どうやって生きていくか。どうやって食べていくか。そういう問題は、活命の問題といわれていいます。どうやって生き延びていったらいいか。何とか食べるようにしたい。皆さんをみると、もうそういう時代を終わられた方がほとんどだと思いますけれども、食べていけないような仕事に就かないといけないところとが、結構大きな問題でしょう。

この活命の「活」は、源信の書かれた『往生要集』の餓鬼道のところででてきます。餓鬼道の苦しみとは、生活の苦しみなんです。食えない苦しみ、恐ろしいと。墓場にあげられた僅かの御供物、それは清浄なるものなので、それだけはちょっと口に入るのだそうですけれども、その他のものは食べようとすると、ポーツと燃えたり、水を飲むとすると、血や膿になってしまつたりして飲めないんです。常にお腹が空いて食えん、食えんと。そういう苦しみに追われるのが餓鬼道です。だから生活の苦とは餓鬼道の苦しみです。それが恐ろしいんです。ただ問題は

ですね、食べられなかったら死にますけれども、食べられても死ぬんです。食べていても死んでいかねばならない。しかし、私たちが直接問題にするのは食っていけないとか、病んで死んでいってしまうとか、そういうところですね。

昔は特に山間部の女性の平均年齢は低かったんです。それは労働がきつかったからなんです。水道ができて水汲に行かなくてもよくなって、洗濯機ができて、ミシンができてくると夜なべをしなくてよくなったわけですよ。昔は夜に縫物をした。そんな人いますか？そういう姿を見てこられた方はおられるのではないですか。子供の頃に親や祖父母が夜になると縫物をしている。その頃はこんなきれいな服は着ていませんでした。みんな肘に継当てがあったり、膝に継当てがあったり。今は継当てがあるものを着ている人はいないですよ。破れたのを着ている人はいますけれども、あれは破つてあるんです(笑) 別に破れたのではなくて、破つたのを売っているのですから面白いですね。昔だったら継当てされ

てしまいますね。

生・老病死

苦しみを減らすために文明を発達させ、医学を発達させてきたのだけれども、そういうことで人間の問題が決着つくんだらうかという、どれほど生活形態が変わって平均寿命が延びても、人間の本当の問題というのはい体何だということは一向に解決されなまま残るんです。それで老病死の前にこの「生」という字があるのです。生老病死で四苦でしょう。聞いたことありますか。四苦八苦の四苦。四苦、生老病死の老病死はよく目に見えますけれども、この「生」というのは、「生まれる」という意味です。生きるという意味ではないのです。「ジャーティ」というサンスクリットの言葉ですけれども、これは「生まれてきた」ということです。これが苦しみということとはちよつとわからないですね、ぱつとは。

たりすると、必ず言うのが、「なぜ」という言葉です。なぜ死んでしまったのか、それはどのようにして死んでいったのかではなくて、どうしてこんな苦しみを受けなければならぬのか、なぜこんな苦しい思いをしなければならぬのかということですね。こんな苦しい思いをしなればならない人間に生まれてきたということはどういうことなんだと。これが根本の問題ですね。ですからこの根本の問題、人間の抱える苦悩というものの一番根っこには、生まれてきたということは何しに生まれて来たんだらうということがある。こんな苦しい思いをして生きねばならぬ、それは一体なぜだ。老病死の根底に生まれてきているという問題があるわけですね。

身と心

ちよつと話が飛ぶかもしれませんが、けれども、この「生死を明らかにする」というのは真宗でも全く一緒だと思ふんですね。それは迷いというものを抱えた身であることを明らかにするということですね。私たちは都合が

悪い事があるとそれを障りと感じます。人間関係でも、あんなことを言われたということが言われただけでは済まずに、言葉がずっと回るでしょう。そのことがずっと辛いわけですよ。そういうことで苦しむことを取り除きたいわけです。取り除くのに相手をやつつけるとか、それともそれを忘れてしまおうかとかね、そういう色々な方法を考えるわけですね。だから基本的に私たちは、都合の悪い事を取り除いて、都合の良い自分になって救われたいと考えます。そうでないですか？ 今何か都合の悪い事ありますか？ 取り除きたいでしょう。あるいは除けないのだしたら、せめてそれを受け止めて安らかに生きていきたいですね。けれども障りというものは、取り除くことも、受け止めることもできないので苦しいのです。生死流転、迷いの身というものは、身ですから心でコントロールできるものではないものとあります。ほとんどできないです、心でコントロールが。身から起こってくる。

怒りの対象に対して攻撃するよりもその怒りが真つ先に焼くのは自分でしょう。怒りによつて相手を攻撃するとしても、真つ先にその怒りによつて焼かれるのは自分自身です。そんな思いをしたことないですか。腹が立つて、腹が立つてしかたがないでしょう。その時は苦しいんですよ。その苦しみが相手に向かつて怒りとなつていくのだけれども、相手に向かつているにもかかわらず、焼かれていくのは自分です。だから怒りはやめた方がいいんですよ。怒らない方がいいんです。でも怒らねばならないようなものを抱えているものから、どれだけ止めておこうと思つても止まないのです、心では。こういうのを宿業しゆくごうといいますけれども、業を宿している、そういう身である。だからひとりひとり違うんですね、怒りどころが。面白いですね。「若いね」と言われたら、今はみんな喜ぶんです。喜びますでしょう、まだ若いねと言われると。ちよつと嬉しいですね。ところが昔だったら、お年寄りに「まだ若いね」と言ったら、青二才という意味ですからね、

「なんて失礼な事を言うんだ」とな
ります。それは業が違うんです。だ
から同じ言葉を言われても、怒る人
と怒らない人がいるんです。そんな
に難しい事を言っていないですよ。例
えば、「馬鹿だね」と言われたら「本
当やね」と言って平気な人がいます。
ところが「馬鹿だね」と言ったら「な
にをー」と言って怒る人もいます。
それは自分の気になっているようなと
ころに引つかかると出てくるんです
ね、怒りが。抱えているものが違う。
心で起こっているようですよけれど
も、身に抱えているものが湧き出し
てきて心で感じているんです。だか
ら心で止めようと思ってもなかなか
止まらないんです。ある程度我慢し
てもやっぱり噴き出してくるんです
ね。

だから仏教ではこの「意^{いちご}」という
字を、意というものは感覚器官です
よと教えています。「面白いでしょう。
意識という自分が生きていると思
う。皆さん、自分が生きていると思
われると思うんです。ところが寝て
いる間は、その私というものがどこ
にいったかわからないでしょう。起
きたとたんに、私が生きていると、
こう言いますけれども、それは私を
感覚している意識なんです。とて
も面白いと思いませんか。仏教で
はこの意識を第六番目の感覚器官だ
と言うんです。だから意が悲しみを
感覚したり、怒りを感じたり、喜
びを感じたりしているのだという
んですね。ですからこの抱えている
身の問題は、心をどれだけいじくっ
てみても解決しないんだというのが
仏教の教えです。私たちは、穏やか
な心になると助かると思っています
けれども、穏やかになるといいう縁が
きたら穏やかになります、また違
う縁がやってくる、擦った揉んだ
するんですね。だから心の上にごん
な信心を立てても心と一緒に崩れま
す。真宗は信心ひとつやと。念仏ひ

とつというのは、念仏の信心を要と
するんですね。
ところがこんなに難しいことはな
いのです。人間に本当に信心ができ
るのか。ちよつと良いご法話を聞く
とね、私のは駄目ですけどもね、
ちよつと良いご法話を聞くとな
く有難い気持ちになって、こう信心
が出てきたような気がしませんか。
しますでしょう。何となくなんナン
マンダブツなんて思っただけで行く
んですけれども、家まで持つかどうか。
三日も持ったら凄いいんですよ。そ
れを否定するわけではありませんけ
れども、人間の心を仕上げて信心と
いうものを仕上げていこうと思っ
ても、心というものは身を抱えてお
りますから、状況が変わると心も変
わってしまいます。

迷いの衆生

もう経験済みだと思えますけど
ね。いろんなことを決意してみたり
したこともあるでしょう。今日から
これをやろうと。恥ずかしいですけ
れども、うちの兄が子供の頃に日記
をつけると言ったんです。ある時、
日記のノートと知らないで開いて見
たんですね。そうしたら、「何月何日、
今日から日記をつける」とこう書い
てありました。それはもう何カ月
も前の日付なんですよ。今日から日
記をつけると書いてそれで終わって
しまったんですね(笑) 今日から日
記をつけようと思っただけで、一
日で終わってしまったんですね。坊
さんは三日ぐらいしないと駄目です
ね。三日坊主という位ですからね。
だから人間の決意というものも、
根性がないのではなくて、縁がやっ
てきたら変わってしまうのが人間の
心です。仏様は人間にすっかりした
心になれとは言わないんです。なん
て言うかという、「迷いの衆生よ」
と、「心の定まらない凡夫よ」と、こ
う呼びかけてくるんです。
そうすると、この中にそういう人
いますか？迷いを生きているんだな
と。いろんな思いを巡巡って、いろ
んな思いを抱えています。特に孤独。
この中で孤独でない人はきつと一人
もいないと思います。家族があつて
も突き詰めてみると、寂しいでしょ
う。その孤独というものは、本当は

通じ合っけいきたいという願いがあ
るからですね。その願いが叶わない
ので、そこに何か祈らずにはおれな
い身を感じるわけです。だから迷い
の衆生、煩惱具足の凡夫、これは仏
様の言葉です。私たちを呼んでい
るのです。その者に心を整えなくて
いいから、我が名を称えてくれと、
こう言うんです。私たちが迷いの身
であるということをもう一度目覚め
させてくれる。人間とは迷いの生
存です。人間に呼び返して、念仏申
さしめるところに、人間に生まれてき
たことの厳肅さや、いのちの深さや
そういうものを与えてくださるので
すね。それを聞きにきたのです。

ただ念仏

これがまた難しいんですね。ただ
念仏しろと言われてもね、それがで
きないんですよ。できますか？でき
ることはできるけども、ただ念仏す
るだけですからね。口を三回動かす
だけですからね、ナムアマミダブと。
できるでしょう。できてもそこにた
だ念仏じゃ済まない色々な思いが起
こるんです。これを言ったらどうな

るんやという思いが起こつてきたり
ね。この言い方で良いのだろうかと
思ったり。何回言ったら良いんやろ
うかとかね。そういうことが出てき
て、とてもただ念仏するということ
はできないです。それはなぜかとい
うと、やっぱり人間が自分の了解を
信頼しているものだから、ただ受け
取るなんてことは出来ずに、自分の
了解で受け取るうと、こうなつてし
まうからなんです。

『歎異抄』という書物の中に、関東
の方から念仏の信心が分からんよう
になつて、ずっと歩いて十余カ国の
境を超えてやって来て、親鸞聖人に
本當の念仏の仕方というのはどうい
うことですかと、こういうことを聞
かれたとありますね。そうしたら親
鸞聖人はただ念仏するより他にない
んやと。難しい道理やらを聞きたい
んやつたら偉いお坊さんのところへ
行つて聞いてくれと。

親鸞におきては、ただ念仏して、
弥陀にたすけられまいらすべし
と、よきひとのおおせをかぶり

て、信ずるほかに別の子細なき
なり。念仏は、まことに浄土に
うまるるたねにてはんべるらん、
また、地獄におつべき業にてや
はんべるらん。総じてもつて存
知せざるなり。

『真宗聖典』六二七頁

こういう言葉が載っています。よき
ひとと法然上人が親鸞聖人に念仏をせ
よと言われた。その時に親鸞聖人は、
それが損だとか得だとか、助かると
か助からないとか、喜べるとか喜べ
ないとかは関係なく、「ハイ」と言っ
たんです。わかりました、念仏を申
させていただきますということです
ね。そしてその念仏は、念仏したら
助かるからするのでないんや。念仏
申さねばならない身だから念仏をす
るんだと。迷いの身だから。だから
念仏して地獄に落ちるのか、浄土に
生まれるのか私は知りません。私に
は関係ない。念仏申さねばならない
身、これをはつきりいただいた。こ
れで十分だ、と言うんですよ。

この「ただ念仏して」の「ただ」
というのは念仏にも係りますし、「た

だ念仏して弥陀にたすけまいらすべ
しと、よきひとのおおせをかぶりて、
信ずる」ここにも係るんです。「ただ
信ずる」。何か良い結果があるから信
じるんじゃない。本當にそうだなと
頷いた。そこには損得やそういう分
別を超えて頷かしめるおはたらきが
あつたんですね。

なぜ念仏するのか

隔月で秋田まで学習会に行くん
です。それはご住職さんらが中心と
なつた十人程度の学習会で、話し合
いをするために大人数にしないで
やつているんです。その時にですね、
なぜ念仏するのかひとりひとり言っ
ていただいたんです。住職さんたち
に、一人ずつ言ってもらつたんです
よ。今も時間があれば端から言つて
もらうと面白いんですけれども。「念
仏しますか？」「一体何で念仏する
んですか？」とひとりひとり聞いて
いったら、「それはただ念仏するんで
理由はないんだ」と。なんか答え
たいですが、「本當かね」と言うとな
を向いたりしてしまいましたけれども、
次々に聞いていったんです。「念仏と

いうのは、不可称不可説不可思議で理由なんかないんだから、その理由があつてするのは自力の念仏で、真宗は他力の念仏だから理由なんかないんだ。唯々念仏するだけだ」、大体がそのような答えでした。四人目位になつたらちよつと変わつてきたんです。「実は私の念仏は、嘘なんです」と言うご住職がおられてね。「実は何にもないのだけど、言わないと商売にならないし、嘘だけでも言っているんです」と言つたんですね。そうしたらその次の人がね、それに力を得たのか「実は私の念仏は、商売であります」と(笑)これ言い過ぎじゃないかなと思つたけど、商売なんですよ。これを言わないと商売にならないから言っているんですよ。そこまで言つてしまふ。住職さんですよ。他人事でないでしょう。そしてまた元に戻つてね、「だいたい、その何のために念仏するか、その質問がいかに」なんて怒られましたね、そんなものは聞くものではないんだと、そういうふうに言われた。

いたんです。どういうことかというのと、「私はある人に念仏をしなさいと言われてハイと言つて、その時から念仏するようになりました」と、こう言われたんです。きみ念仏をしなさいと言われた言葉がね、胸に響いたので、その時から念仏をするようになったと。どういうことかともうちよつと聞きたいと思つて黙つて待つていましたら、ちよつと間をおいてから語つてくれました。青森のものすごい大きなお寺のご住職さんなんです。法務員の方が九人もいてね。九人もいないと回らない位の大きなお寺なんです。そのお寺の住職さんがまだ若い頃、学校を出て、結婚して出先で暮らしていたんだけど、いよいよお寺に帰ることになった。お寺に帰つてきてからが、大変だつたみたいなんです。夫婦の間のこととお寺のことが上手いこといなくなつて物凄く苦しんだ。自分がその間に挟まつてしまつて、段々その苦しみが募つていつてしまつて、段々死にたくなつてきたんだそうです。教えを聞いているけれども、教えが間に合わないで死に

どうなつてきた。念仏してみても何にもならないし。ある時に、用があつて出先で友達の所に寄つたそうです。ちよつと法座が開かれていてね、じゃあその法座にあつていこうかなあと思つたそうです。ただ一番後ろに座つて聞いておつた。私は二十年程前に北陸に來ましたけれども、北陸に來てこつた。私に聞法会に出ますとね、大体人が集まつてくると前から詰まりましたよ、昔は。昔は座布団だったので、座布団を下にも膝の上にも乗せてね、その上にもう完璧にへアピンみたいに曲がつて、それで首を縦に振つたり、横に振つたりしながら頷いていた方がいっぱいいました。前から詰まつていつたんですよ。しつかり聞かせてもらおうということ。ところが最近は何から詰まつてきますね。つまらない話ならそつと後ろから帰ろうと思つているのか分からないですよ(笑)

ひとつも自分の救いにならない。一言も自分の救いにならないと思つているもんですから後ろの方に座つて出てきたのが普通の和服を着たおばあさんでした。御門徒の方がお説法された。その方のお説法が一時間位あつたそうですが、人生というのはお芝居みたいなものでね、それぞれ役割があつて、いろんなことがあつて、そして幕が閉じるもんですよ、そのようなお話をずつとしてくれたそうです。話が終つて、質問がありますかと言つたら、いろんな人が質問したり答えたりして、彼も聞いてみようかなと思つてね、手を挙げたそうですよ。そして彼は「人生が芝居のようなものであるのならば、私に与えられたこの役は降りた」と思ふんですよ。つまりもう死にたいということなんです。そう言つたらそのおばあさんが、「お念仏をしなさい」とこつと言つたんです。でもまたかと思つたんです。それは知つていない。でもそれが役に立たんではないかと。救いにならないかと、

ずつと回つて最後の人に來た。その人が言つたのは、みんなと違つて

れども、教えが間に合わないで死に

きたのに、これだけ聞いてきたのに

かど。救いにならないかと、

こう思ったと言っていました。そしてら一番前に座っていた着物を着たおじいさんが後ろを向いて、その住職さんに「そりゃあ、あんたそのお芝居の演目が南無阿弥陀仏だからな」とこう言われた。こっちの言葉が耳に残ってしまったと言うんです。いろんな人生がある。いろんな思いをしなければならぬ。でも本願の物語ではないのちはないんだと。どんなのちもね、どんなふうな思いをして、どんなふうにならぬ死んでいっても、それは全部南無阿弥陀仏の物語、本願の物語なんだと。つまり全部大切ないのちの相^{すがた}なんだと。仏さんは決して幸せとか、不幸とかそんなことで人間を受け止めたりしない。苦しければ苦しいほど、大切ないのちであると受け止めて立ち上がっている。本当に人間の悲しみと苦しみを全部知って、受け止めて立ち上がっている、それが南無阿弥陀仏なんだと。

そういうことがあった後、恩師の先生の所に寄った時に「君、念仏をしなさい」こう言われた。その時は、素直に「ハイ」と言えたそう

す。だから、そこから念仏するようになりましたとおっしゃっておりました。

如来回向の信心

もう一度『歎異抄』をよくたずねてみると、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」(同上)念仏しなさいと言ってくださった方があったんですね。よきひと、法然上人ですが、その方の言葉におおせをかぶりて、そうやなど願いた心を信心とあるのであって、私たちの心で固めたどんなものも、思想もそういうものは真実信心とはいわない。人間作りの信心だ、仮の信心です。仮だから消えてしまう。だけれども呼びかけられて願く。信心とは願いた心です。如来がはたらきかけてくるのを如来回向^{にょらいえこう}といい、その回向に願いた心を回心^{えしん}といいますが、この回心、願く心を信心といえます。ですから私たちは、ひとたび自分を超えて自分はずっと呼びかけてくる声を聞いたら、そこから本当の聴聞が始ま

るんです。わかってもわからなくても、喜んでも喜ばなくても、信じられても信じられなくても、確かなのはお育てをいたただかねばならない迷いの身を生きていくということ。そのことに呼び返され、呼び返されてご聴聞をしていくのが真宗門徒の生涯です。呼び返されていくことに深く自分をいただいていく。そういうことが真宗門徒の生涯というものです。

まさに親鸞聖人がそうやって二十九歳の時に本願に帰した。ところがいろいろなことがあって八十五歳になって、前の年には大切な息子と縁を切っている。断腸の思いで、悲しきこととなりと手紙に書いています。「親ということあるべからず、子ということおもいきりたり・・・悲しきことなり」(『真宗聖典』六一二頁)と。そういうようなことを通してまた、「弥陀の本願信ずべし」(『真宗聖典』五〇〇頁)という夢のお告げをいただいておられますね。

だから聞いて終わる教えでなくして、聞こえたところからいよいよ深く何遍でも呼び返され、何遍でも本

当にそうやなあと深くいただいでいく、それが聴聞ということでございます。親鸞聖人の報恩講にあたってそのことをお伝えして終わりにしたいと思いますが、お聞きになりたいことか、ご感想がありましたらどうぞご自由に。ないですか？もう聞いておかないと今晚かもしれませぬよ(笑)

(声)「わからない」。うん、わからんね。ただ親鸞聖人が言うには、いのちの終わる相^{すがた}はどうでもいいんだそうです。お念仏の中に生きて、お念仏の響きの世界に帰っていくので、凡夫の相ほどのようでもいんだと、こう言われます。それでは、これで終わりますでしょうか。ようこそお参りくださいました。

《講師紹介》

佐野明弘(さの・あきひろ)

一九五八年静岡県生まれ。加賀市蓮如上人御旧跡光岡坊住持。一二歳で仏門に入り、六年あまり禅宗僧侶として修行。三五歳で真宗僧侶に転ずる。アレン・ネルソン平和プロジェクト代表。

◇本文は平成二七年十月十七日、浄光寺「報恩講」大速夜の法話録であります。洵^{まこと}に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきます。